

教育方法論における模擬保育の検討

新 岡 礼 伸

1. はじめに

2017年に文部科学省は教職課程コアカリキュラムの在り方を策定し¹⁾, 各大学において教職課程で修得させるべき内容や目標が明示された。学生が習得する資質能力を「全体目標」、全体目標を内容のまとまりごとに分化させた「一般目標」、学生が一般目標に到達するために達成すべき個々の基準を「到達目標」として表した。幼稚園教諭養成課程における領域及び保育内容の指導法に関する科目のうち、各科目に含めることが必要な事項として保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）があり、その全体目標は「幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された当該領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。」としている。さらに、（2）保育内容の指導方法と保育の構想の到達目標の④で「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。」としている。

現代教育方法辞典（日本教育方法学会, 2004）²⁾によると、「教育方法学は、授業とか生活指導という教師が営みつくり出す具体的実践の事実をもととして、授業とは何かを明らかにするものである。そうした教育実践の中でつくり出される具体的事実を

もとにして、その事実の中から原則的なもの、法則的な原理を引き出そうとする学問である」と定義している。「授業」という言葉は小学校以降の教育機関で使用する言葉であるので、これを幼児教育に置き換えると「保育」になるだろう。また、教育方法・技術の特質として「何のために、何を、どのように」教えるかという「目的—内容—手段」の関係について常に新しい関係を樹立する創造的性格」にあるとし、指導計画を作成することでそれらの関係がより明確になると考えられる。さらに模擬保育とは「保育士養成課程にある学生や研修中の保育者が、保育の組み立て方や援助法などを体験的に学んだり検討するために、実際の保育を想定した場で実践を模して行う保育」としている。

富木田ら（2017）³⁾は、授業を受講している全ての学生が保育実践者となって模擬保育を行うことの有効性をあげながらも、単独の科目内で全学生が保育者役となって行うには1人当たりの時間が短くなること、導入部分の実践であった場合、導入後の保育に入る前の段階で実践が終わってしまうことは保育の流れを止めることになり、保育の組み立て方や援助法を学ぶという模擬保育の本来の目的から離れてしまうことを指摘している。また、ある程度の実践時間を確保するために学生をいくつかのグループに分け、同時に複数の学生が実践することで時間についての問題を解消している松山（2010）の報告を取り上げ、学生がある程度まとまりのある保育実践が可能になるように、また、十分に実践を振り返ることが可能になるように実践する学生を1名に限定した模擬保育を縦断的に行う実践を報告している。

杉村・安東（2018）⁴⁾は、模擬保育の方法論やその効果についての従来の研究において、模擬保育を

令和2年11月30日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8056 FAX 0877(49)5252
Email nioka@kjc.ac.jp

通して学生の様々な学びや省察が促されることが明らかにされているが、これらの研究では保育者、子ども役、観察者のそれぞれを行うことで学生が何を学ぶのが明確に示されていないという問題点を指摘している。

これらの研究から模擬保育が保育における教育方法・内容の理解を深めることは明らかにされている。本学の学生も模擬保育を行うことにより同様の学びがあるとすれば、より深い学びとするための授業の在り方について検討する必要がある。

本研究では、教育方法論という科目の中でグループで模擬保育の計画を立案・実施し、富木田らの研究と同様に一人一人が保育者役となれるように模擬保育の途中で保育者の役割を交代しつつ、その振り返りを模擬保育の様子を撮影した映像を観て行い、授業記録からそれぞれの役割を経験することで何を学んだのか考察を行い報告する。

2. 方法

(1) 対象者

教育方法論を受講している保育者養成系短期大学所属の学生92名を対象とした。

実施日：令和2年6月～令和2年8月 全26回

(2) 授業全体の流れ

保育者養成系短期大学所属の学生92名を3～5名に分け、26班のグループを作った。

指導案作成方法について講義を行い、グループごとに指導案を立案させ提出させた。模擬保育の時間は30分程度とし、内容によって30分を越える計画を立案した場合は、特に主となる活動のみを30分で実施することとした。また、模擬保育の様子をビデオ撮影し、振り返りを客観的な視点からできるようにした。

模擬保育では受講学生を子ども役と保育者役に分かれ行った。発表グループ学生のうち1人が保育者役となり、その他の学生は補助教諭役及び実習先の指導教諭役とした。また模擬保育の途中で保育者役を交代し、グループメンバー全員が経験できるようにした。

模擬保育終了後は教員による講評を行い、その後

個々の学生に模擬保育の振り返りを行うための模擬保育評価表を配布し、後日提出することを求めた。

(3) 模擬保育評価表の項目

①ねらい・内容の評価、②対象年齢、望ましい時期の評価、③子どもの活動の感じたこと、④保育者の援助・配慮の感じたこと、⑤環境構成の評価、⑥環境構成の提案、⑦子どもの活動の評価、⑧子どもの活動の提案、⑨保育者の援助・配慮の評価、⑩保育者の援助・配慮の提案、⑪感想等とした。

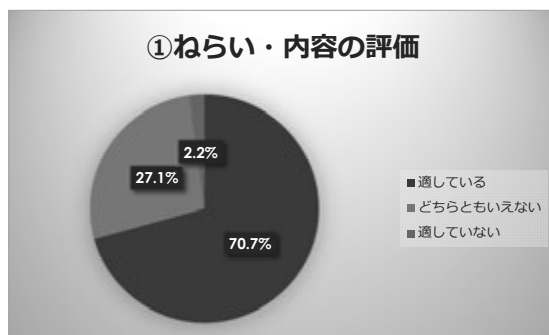
また、①、②は3段階評価、⑤、⑦、⑨は6段階評価、③、④、⑥、⑧、⑩、⑪は自由記述とした。

3. 結果と考察

模擬保育の実施回数26回中、模擬保育評価表回収件数は合計626件で、有効回答データは①598件、②599件、⑤597件、⑦593件、⑨593件となり、それをもとにどのような学びがあったかについて考察を行う。

(1) ①ねらい・内容の評価について

適しているが70.7% (423件)、どちらともいえないが27.1% (162件)、適していないが2.2% (13件)となった。ねらいと活動内容が合致しているのかを評価しているものと考えたとき、活動内容そのものについては肯定的にとらえていると考えられる。

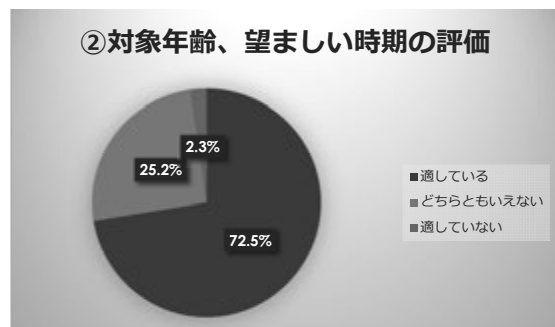


(2) ②対象年齢、望ましい時期の評価について

適しているが72.5% (434件)、どちらともいえないが25.2% (151件)、適していないが2.3% (14件)となった。計画では対象年齢と実施時期をふまえて

活動内容をたてているが、その内容が実施する月齢の子どもの姿とあっているのかについては①のねらいの評価と比べほぼ同様の評価となっている。

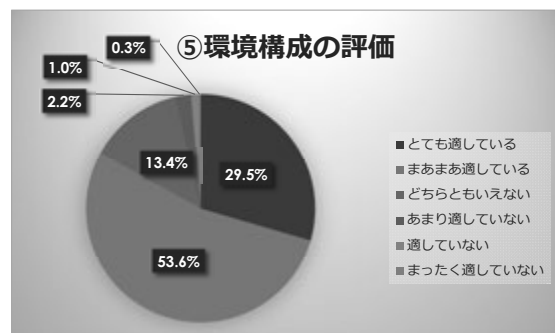
②対象年齢、望ましい時期の評価



(3) ⑤環境構成の評価について

とても適しているが29.5% (176件)、まあまあ適しているが53.6% (320件)、どちらともいえないが13.4% (80件)、あまり適していないが2.2% (13件)、適していないが1.0% (6件)、まったく適していないが0.3% (2件)となった。

⑤環境構成の評価



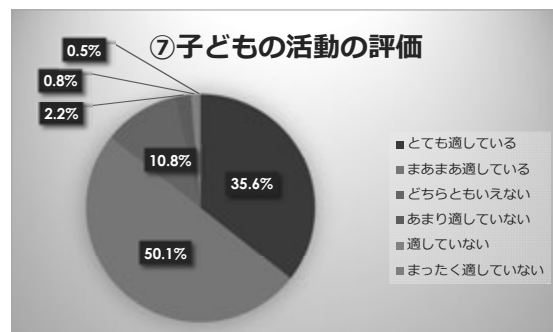
とても適していると比べまあまあ適していると評価している数値が大きいのは、計画段階ではおおよその環境構成はできているが、実際に保育を受けた立場から見た環境構成では、子どもの視点からもっとこうすればよいのではないかと考察することができたと考えられる。

(4) ⑦子どもの活動の評価について

とても適しているが35.6% (211件)、まあまあ適しているが50.1% (297件)、どちらともいえないが10.8% (64件)、あまり適していないが2.2% (13件)、

適していないが0.8% (5件)、まったく適していないが0.5% (3件)となった。これも環境構成の評価と同様、この活動内容であればこの時期の年齢であればもっとこうすればよいのではないかと考察することができたと考えられる。

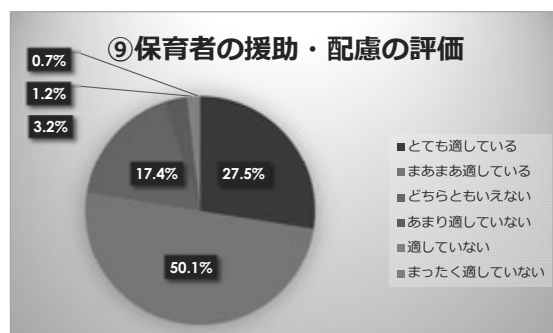
⑦子どもの活動の評価



(5) ⑨保育者の援助・配慮の評価について

とても適しているが27.5% (163件)、まあまあ適しているが50.1% (297件)、どちらともいえないが17.4% (103件)、あまり適していないが3.2% (19件)、適していないが1.2% (7件)、まったく適していないが0.7% (4件)となった。

⑨保育者の援助・配慮の評価



とても適しているが⑤、⑦と比べ数値が下がっていて、どちらともいえない以下の数値が上がっているのは、保育者の援助について実際の保育場で子どもを観察したり関わる経験が少ないため、保育者役となったときにどのように動けばよいかわからなくなり、子ども役が製作している場面等で机間巡視をせずにその場に立ち、様子をうかがうのみとなってしまう、子ども役の活動に対して認める言葉かけなどを積極的に行えていなかった場面が多くなった

からではないかと考えられる。また、もっとこのようにすればよいのにと子ども役が評価できるのは、自分が計画、実践の当事者である保育者ではないため、ゆとりをもって模擬保育を受けることができているからだと考える。

(6) 担当教員からの講評に対する自由記述について有効回答78件を次のように分類した。①実践を通しての気づき、②指導計画での気づき、③他者の実践での気づき、④対象年齢ではない実践での難しさ、⑤その他とし、それぞれの件数は下記のとおりである。

①14件、②11件、③33件、④3件、⑤17件となった。

以下は主な記述である。

①実践を通しての気づき

- ・製作の手順と時間を書く。
- ・説明が長く子どもたちが何をしたらいいかわからなくなる。
- ・ねらいにそった声かけをする必要がある。
- ・ゲームをしている子どもたちにばかり気を取られ、応援して待っている子どもへの配慮が全く考えられていなかった。これを保育者1人で行うとなると、やり方をもっと考える必要があると思う。
- ・こどものちょっとした動きを見逃さず、その行動の意図を考えて援助していく必要があるということがわかった。
- ・画用紙の大きさをしっかり覚えようと思った
- ・指で使うのりは、水のりではなくでんぷんのりだと分かった。
- ・小さい紙コップ一つを4人でつつついていたらこぼすだろうと感じた。
- ・自分たちのやりたいことが上手く伝わらないんだと思った。もう少し、言葉や内容を変えなければいけないと思った。
- ・分では気づかなかったところも気づいた。しっかり振り返りたい。
- ・話し方が淡々としていたことを教えてもらって、もっと話し方が上手になれるようにしないといけないと思った。

②指導計画での気づき

- ・「難しそうであれば支援する」のではなく、難しそうにしている子どもにどういった支援をするかを書く。
- ・待っている子が出てくる場合待っている子が何をするのかを指導案に書く。
- ・子どもの活動の中で、制作に入ると書いたあとに、具体的な活動内容を書いた方が良い。
- ・活動の中で保育者がどの部分まで手伝い、子どもがどこまで行うのかあらかじめ決めておく和良好的だと聞き、事前の準備の大切さを学びました。
- ・子どもの活動を細かく書くことを学びました。
- ・ねらいと活動内容が合っていない部分もあったので、今回のことを振り返り次へ生かしていきたいです。
- ・指導案の子どもの活動のところですごく細かい動きまで書くことが自分もできていなかったので次からしようと思った。
- ・事前の準備物確認はすごく大切だなと思いました。
- ・模擬保育の中で、ねらいと内容が一致していなかったの、ねらいにそった活動ができると思いました。
- ・子どもの行動や感情を理解して指導案を書いていく必要があると感じた。

③他者の実践での気づき

- ・子どもの活動に対しての意欲が高まるような声掛けも必要である。
- ・スライムの中でも様々な遊び方や作り方があるのでやってみたいとおもいました。
- ・順序立てて一つ一つ説明して作業をするようにすると子どもも分かりやすく行えることが分かりました。
- ・マラカスは季節のものを使うことで季節を感じることもでき、こんな音になるんだと思うことができて、いいなおもった。
- ・もっと配慮とかしないといけないと感じました。
- ・歌は楽しんで歌うためのもので導入のために歌うものではないと思った。

- ・見本と作るものを一緒にしておかないと作る時に子どもにとってすごく難しく感じることに気づかないから気をつけようと思った。
- ・子どもが今からする活動についてワクワク感や、やりたいという気持ちになるような言葉かけや前もってのちょっとした仕掛けのようなものがとても大切だと思いました。
- ・子どもが実際にしそうな行動をみて、こういう行動もあるんだと思った。子どもの行動を予想することは大切だと感じた。
- ・保育者の態度や言葉づかいなど、1つ1つの行動に気を使うことも保育者としての資質を問われると思った。
- ・自分の発表の時にも気をつけようと思いました。
- ・場面ごとでの声かけが大切だとわかりました。

④対象年齢ではない実践での難しさ

- ・まだ5歳なので、一度に言われてもなかなかその通りには動けないので2つか3つまでの指示で、できたら次の説明をするのがよいと思いました。
- ・「自由に」とか「好きなように」と言うのは一見、自主性を感じさせますが、ねらいを踏まえての支援が必要だと言う事がわかりました。
- ・大人だからいっぺんに言われても指示を理解し、行動することができますが、確かに子どもは、一つ一つ伝えていかなくては、理解するのは難しいです。
- ・小さな穴に紐を通したり、鈴を結ぶのはまだ難しいので先に紐に通しておいたり、紐の先を固めて置いたりする配慮が必要である。

⑤その他

- ・模擬保育をやっている最中は、進めることで精一杯だったので、冷静に子どもの様子を見れるようになりたいです。
- ・導入の1つ1つの言葉がけでも子どもの想像力を豊かにできたり、説明の仕方では大人にはわかるけど子どもにはわからない言い方があることがよくわかる動画だった。

- ・ビデオを見ることで、子どもの立場では気づけなかったことに、気づくことができた。
- ・映像を見ながらなのでわかりやすかった。
- ・今回の模擬保育では教師が4人でやっているけれど、実際には教師は1人だと思うので大変になるだろうなと感じた。
- ・実際、している時はそんなに思わなかったけど、ビデオを観て子どもが1回に言われることが多いなと感じた。
- ・ビデオを撮って見返すということは、初めてでしたが非常によい試みだとおもいました。
- ・模擬という事で、みんな保育者という自覚がもてていない状態なんだと講評を聞いて思いました。

これらの自由記述から、指導計画を立案する際には気が付かなかったが、実際に活動することによって子どもの動きや保育者の援助がイメージでき、それをもとに子どもの姿を見直し、必要な環境構成や活動の内容と流れ、援助方法を組み込むことの重要性を学ぶことができたと考えられる。また、記録したビデオを観ることによって、自分では気づけなかったかかわりを見直す機会となった。また、他者の実践を経験することによって気が付くことが多くみられたことは、対象年齢をロールプレイすることの難しさはあるものの、実践の計画と実際の実践とのずれを模擬保育によって気づく機会につながっていた。

4. おわりに

本研究では、模擬保育を行うにあたり、指導計画を立案する際に複数人によるグループで子どもの姿を思い浮かべながら作成していくものの、その時点での最良と思われる計画であっても実践を行うことで自分自身の気づきや他者の視点、気づきを共有することの大切さ、イメージを深めることの大切さを認める機会となっていることが分かった。

しかし、実際の保育環境に近づけてはいるものの、現場とは異なる教室での実践や学生が子ども役をする際の子ども理解とロールプレイすることの限界もある。また、実践後に改善した指導計画を作成

することにより，より理解は深まるとは思うが，実際に園で園児を対象に実践することができれば，より実践力が身につくと考えられる。教育方法論だけでなく，他の科目とのつながりを強化することが，模擬保育を行うことの意義をより高めるものと考えられる。

参考文献

- 1) 「教職課程コアカリキュラム」，教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf, 2018.5.21)
- 2) 日本教育方法学会編 (2004). 現代教育方法事典. 図書文化社.
- 3) 富木田智子・青山佳代・森山雅子・笹瀬ひと美, 2017, 保育に対する学生の認識の変化, 46巻, 愛知江南短期大学紀要, 23-34
- 4) 杉村智子・安東綾子, 2018, 保育内容の指導法における模擬保育実践, 第3号, 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要, 77-87